
Fallen Angel

鈴羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fallen Angel

【Nコード】

N4126W

【作者名】

鈴羅

【あらすじ】

異世界では魔法を使うことが許される。禁忌としてさげすまれてきた魔法は、人々の生活の糧となっていた。

だがその長年の歴史に大きな変化が起こる。Fallen Angel（墮天使）の力。それは今までの魔法の常識を覆す危険で神秘的なものだった。

これは摩訶不思議！？女子高生の魔法生活の続編です。
前作主人公西兼香喃の弟子、真田晁燈の物語。

魔力は特殊ではないものの、優秀な魔法使いの弟子である晁燈はあ
る日少女に出くわす。

そこから晁燈の力は目覚め、成長していく。

一方、その少女の内なる力も、次第に確実に育っていくのだった。
晁燈は少女を守り抜くことができるだろうか？

前作よりは、ちょっと恋愛要素を入れたい（願望）です。

初めての読者様、初めまして。

前作からの読者様、これからもよろしくおねがいします。

あ、なんか題名とか解りにくかったり、途中出てくる英語っぽいのが
わかりにくいかもしれないので後ほど解説ページをつくるのかも、
しれないです。それまではどんどん読み方とか意味とか質問してく
ださい。

用語（前書き）

小説ではありません。

用語

小説に出てきた用語に関して解説するページです。

基本的には上から行くほど古く、下に行くほど新しくなります。これから増えて行きます。まずは基本情報。登場人物の名前です。簡単な説明は加えますが、摩訶不思議っ！？女子高生の魔法生活を読む事をお勧めします。そちらの方では西蒹香喃と紅桐沙捲の関係や基本的な情報が小説の中に盛り込まれております。

にしおきかなん
西蒹香喃

洋名ラナ・アーシャ

実年齢797歳。17の時に沙捲と出会い魔術師となつたため姿は17歳の高校生のまま。

自覚はしていないが数々の経験を積み、今では容姿的にも雰囲気的にも誰もが振り返るような”綺麗な”人。魔術や武道では鬼才と呼ばれるほど優秀。そして恐ろしく希少で強力な虹の魔力を持つ。

くわんじしやうま
紅桐沙捲

洋名レイン・ストライフ

享年797歳。香喃が17歳の時死亡。香喃の魔法の才能を見抜き、魔術師にするきっかけを作る。

まいたあさひ
真田晁燈

17歳。ごく普通の高校生。才色兼備で非の打ちどころのない青年。人並み外れた集中力を持つ。

ガザ

沙捲の朋友。

沙捲の弟子であった香喃を自分の娘の様に思っている。

今では魔界で最高権力を誇る帝王に進言ができるほど優秀な魔術師。

帝王

魔界を作り上げた本人。

外敵から魔界の礎である城を膨大な魔力を使いまもっているため長い時間城から離れることは不可能。

見た目は普通の爺さん。

坂本千秋

香喃が高校生だった時の剣道部顧問。

生徒からは絶大な人気を誇っていた。転任してからの行方は香喃も知らなかった。

5

ここから下のページの基本的な見方は

”用語”

出てくる話数

意味

読み方

何処の言葉か

この他にも固有名詞なども出てくると思いますので、説明の方法は変わっていきます。

” Fallen Angel ”

小説のタイトル

墮天使

フォーレンエンジェル

英語

” rafaga ”

第一話 思い出の始まり

突風

ラファガ

スペイン語

” 時空の狭間 ”

第二話 序章（1）

説明・・魔界と人間界とは時間の流れが違い、魔界と人間界はいくつかの時空うちの2つとなります。その時空を香喃のつくったナイフで切ることにより、いくつかの時空をショートカットし一気に魔界と人間界、それ以外の時空へと好きなところへ一発で行けてしまっただけです。

” カッターナイフ ”

第二話 序章（1）

説明・・この説明でのカッターナイフ（以降ナイフに略します）とは香喃が空間を斬り取る時に使った物の事です。普通の刃物でも

ちろん空間は切れませんので、香喃は自分の魔力をただのカッターナイフに注ぎ込みました。

” L l u v i a ”

第三話 序章（2）

雨

リウビア

スペイン語

説明・・沙捲がかつて飼っていたドラゴン。名は無かったので沙捲の死後香喃が引き取った際につけた。

鱗は光によつて色が変わるがほとんどが銀 灰色

” c a l o r s h o c k v a g u e ”

第三話 序章（2）

熱の衝撃波

カロール ショック ヴァーグ

c a l o r ラテン語

s h o c k 英語

v a g u e フランス語

” m i s t l e t o e b r a c h i u m ”

第五話 序章（4）

宿り木の腕

ミソルトウ ブラキウム

m i s t l e t o e 英語

b r a c h i u m ラテン語

” ルルディ・シルワ ”

佐賀希の洋名。

ルルデイはギリシャ語で、ギリシャ文字がないので表記は出来ませ
んが、

ルルデイ・・・花

シルワ・・・silva ラテン語で森

名づけられる時に花の髪飾りをしていたのでこの名前になりました。
結構帝王の名前のつけ方は適当です。

今は師匠のガザの元より、新たに弟子入りをしているミラの元に居
る方が多いです。

ガザは娘に反抗期がきたような気持ちだ（娘ではないし娘はいませ
んがw）とこぼしていました。

”bird of prey・talon ”

第六話 序章（5）

猛禽の鉤爪

バードオブプレイ・タロン

英語

自分の体の一部を、他の物に変化させる術です。

”liberation”

第六話 序章（5）

解放

リベレイション

英語

魔法を手つとり早く解除したいときに言います。だいたいは気分
で。

用語（後書き）

まだまだこれから追加予定です。

解らない事があつたらお気軽に質問してください。

それと呪文は正直言つて自分の好きなモノを盛り込んでいるだけです。

出来方についてはまた本ペンで触れることがあると思いますが、同じような語句が出てくる事もある事を承知しておいてください

挿絵（前書き）

小説じゃないっす。

挿絵

og1厚かましいながらも、挿絵に手を出してみました……。小説を呼んでくれている方で、キャラのイメージが固まっている人は見ない方がいいかも……。

もしかしたらイメージが崩壊するかもしれないです。

へったくそなんですけど、書いてみた、程度なんで適当に流して下さいw

でも結構時間かかりました。

肩と首が痛いですw

なぜ第一段がミラさんなのか……。それは私にもわかりませんw
書きやすかったんです大人のお姉さんって感じで……。洋服はいつも黒マントなんですけどちょっと腰のところを絞って、ブーツでも履かせて……。(黒い長靴じゃないんです。)

おねえさんですね。私の中では完全に。目もとの黒子がチャームポイントです。

PCのペンタブで書いたんですが残念ながらみんに投稿できる形式ではなく、携帯で撮影し、それをPCにメールし取りこんでやってみてみんなに投稿、という感じで画像がちょっと荒いです。

>i31896—4055<

全身

>i31897—4055<

アップ

挿絵第二弾 w

今度は香喃ちゃんです。制服です一応。
ちやっかり薄化粧くらいはしています。

```
> i 3 2 2 0 1 | 4 0 5 5 <
```

全身

```
> i 3 2 3 5 4 | 4 0 5 5 <
```

顔アップ

```
> i 3 2 2 0 2 < r u b y > < r b > 4 0 5 5 <  
洋名 < / r b > < r p > ) < / r p > < r t > ラナ・アーシャ < /  
r t > < r p > ) < / r p > < / r u b y > の ロ
```

沙捲さんが亡くなってからはあんまり表情を出さないようにしてい
たんですけど絵は特別に。

裏設定ですが手首にはブレスレット、髪の毛のリボンも沙捲と一緒に出
かけた時に買ってもらった物です。

思い出の始まり

思い出の始まり

俺の名前は真田晁燈で、ちなみに今は17歳の高校2年で、男で、それと・・・えーと・・・

そっだ、いつも言われるんだけどまたやっちゃった。文が長いって先生に言われる。あ、今の少し短くできたよな？点じやなくて丸を打って言われるんだけどまあ癖ってなかなか治らないもんな。ちよつと解りにくいかもしれないけどごめん、許して。

あと、これが一番大切なんだけど俺魔法が使える。

ああ信じなくなったっていいってば。笑笑笑笑。俺だって最初は信じてなかったし、えつと俺の師匠のラナ・アーシャっていう人だって・・・今はもちろん尊敬してるよ？でも変な人って思ってた。

俺が魔法に触れるきっかけを作ってくれたのは師匠だった。あ、蛇足かもしれないけどずっとごく綺麗な人で・・・ホントに一目ぼれするぐらい綺麗。自分では気付いてないみたいだけどね。

・・・それと俺は一目ぼれしてないからな。

とにかく、俺の行ってる高校に転校生として来たんだけど、まあとにかく綺麗ってだけで他は普通の人だったかな。

・・・最初はね。

「はい、隣の人とペア組んでー。」

晁燈は小さなため息をついた。

なんでこの人がとなりなんだろう。この頃皆冷たいし、すんごい睨んでくるし。

「……俺は悪くないだろ？」

「真田君……？」

そう、この人が元凶。

西兼香喃っという転校生。

転校生が可愛いって本当だったんだな。めちゃくちゃ可愛い。

スタイルも良くて、性格も優しいみたいだし、欠点は見つからない。そんな人だったんだ。

うちの高校は珍しく男女混合の体育がある。

今日はバスケットボール。

「あ、ごめん。」

すぐにボールを手に取り2人はウォーミングアップを始めた。

ドンツとボールが腰にあたる。

「たっ……」

この重みからすれば明らかに意思を持ってぶつけられたのだろう。

「あゝごめん！」

なんとかバランスを立てなおすとケラケラと笑う声が聞こえてきた。

『……慣れっこよこんなの。』

香喃はふん、と心の中で鼻を鳴らし笑顔でそちらを振り返った。

「うっん大丈夫。」

つくろった笑顔でボールを返してやるとボールをぶつけた本人は予

想外の行動にきよとんとしている。

『何年高校生やってると思ってるのよ？』

背を向けようとすると思燈が怒ったような顔つきでこちらへ向かってくる。

『うわ・・・』

「おい植月！ちゃんと謝れってば。」

見かねた晁燈が言うと植月と言われた少女は頬を膨らませた。

「いいよ。だいじょぶだいじょぶ。」

香喃は整った顔つきを見上げながらぼんやりと考える。

モテるだろうなこの子。

この子、と言ってしまうのが悲しい性である。

でも確かに晁燈は精悍な、しかも綺麗に整った顔つきをしているのだ。

性格もこんなだし、きつといい子なんだろう。

『あ、また言っちゃったよ。』

内心苦笑しながら2人を見る。

高校生なんてこんなもんだ。自分の長所になんて気づく余裕はなく、しかも表面的な短所は言えても核心的な短所には気づけない。

いや、気づきたくない。ただ自分の嫌なところだけが露出するよう気がしてそれを包み隠そうとする。自分からも見えないように。

それに気づけないから相手が自分の持つていない物を手にしているような気がして、嫉妬心が沸いて、理不尽な思いを募らせる。

自分の事で精一杯で周りが見えない。

『・・・私もそうだったのかなあ』

何百年も前の事を思い出してぼーっとしているとすっ、と手を差し出された。

「大丈夫？」

香喃は手を取らずに立ち上がった。

『面倒事は御免よ。』

今度は魂の抜け出そうな大きなため息をつき、香喃はボールを受け取った。

「うわ、 Dank!」

誰かがそう口走り、香喃は何と無く顔を上げた。

ボールを手にし、楽しそうに走り回る晁燈が目に入ってきた。

「うわまた!」

助走をつけて飛び上がった晁燈はボールをネットの中に叩きつけた。

晁燈のいるチームはどんどん点を積み重ねて行く。

女子から黄色い悲鳴が上がる。

「ふん……」

香喃はしばらく前に職員室に忍び込み、資料を見た事を思い出す。

真田晁燈 17歳。身長は174センチ。母親は難産の末晁燈を生んですぐに死亡、残っていた父も晁燈が3歳の時に行方不明になっている。今まで孤児院で暮らしていたが今は寮生のこの高校で暮らしている。運動神経抜群、そして学力も高い。友人関係も良好。

「……典型的な出来る子ね。」

また晁燈がシュートを決めてチームメイトからぐりぐりと頭を撫でられている。

「……探りを入れてみようかしら」

香喃は意味ありげな笑みを浮かべて試合を見守っていた。

試合は女子の番。

正直”色々”とあつて疲れた香喃は出たくなかった。
だが仕方ない。怪しまれても困るし。

「おい晁燈見てみるよ・・・」

誰かが啞然とした声で晁燈に言う。

「ん？」

「西兼つて・・・プロ選手？」

「はあ？」

意味のわからない物言いに戻ると後ろを振り返ると調度香喃がスリーポイントからのシュートを決めるところだった。

香喃のいるチームは33点、相手チームはたったの6点・・・。

見ていないうちに何があつたのか。たしかさつきまで香喃のチームは6対4で負けていた。

「あいつ強化選手か？お前バスケ部だろ！？みるつて！」
「・・・」

晁燈は香喃の動きに見入っていた。

まず無駄がない。ゆっくりとした動きの中にも隙は全くなく、敵の手の隙間をするすると縫うようにしてゴールへと近づいている。

その時、一瞬香喃と目が合った。

「え・・・？」

香喃は口の端を上げ、助走をつけ始める。

『いやいや、いくらなんでもあの距離は・・・』
皆がそう思っただろう。

助走と言っても周りを敵のチームに囲まれてろくな距離はない。

香喃はバスケ部の期待を裏切りほぼ垂直にとんだ。

ザンッ

小気味の良い音を響かせ、ボールがネットを揺らす。

そして香喃は片手でリングをつかみ、ゆらゆらと揺れていた。
トント、と軽い音を立て床に降りると思い出したようにピピーとい
う笛の音が響いた。

しばらく体育館は沈黙に包まれる。

テンテンテン、と落ちたボールが床に転がって晁燈の方へと向かっ
てきた。

「……」

『……調子に乗りすぎた……』

香喃が内心後悔していると何かがはじけたように皆が騒ぎ始めた。

熱気に包まれ、まるで大会の様な歓声も響く中香喃は皆に囲まれる。

「お前バスケット部入れ！入って！絶対入って！」

「ため、ずりいぞ！なあ陸上入れって！高跳び高跳び！」

「すごい西兼さん！なんであんな飛べるの！？バスケット部の！
？」

「他のスポーツは！？うちの部にも入って！」

作り笑いでごまかしていると授業終了のチャイムが鳴った。

「ほーらもう皆終わりだ！片付けしろ！」

先生の声が響き、しぶしぶと生徒が片づけを始める。

香喃も慌てて落としっぱなしだったボールを探すとスツと目の前に
それが差し出された。

「あ……」

「お前バスケット部やってた？」

晁燈が案の定話しかけてくる。話しが繋がるようにと答えを考えて
いると先生が2人を呼んだ。

「西兼、バスケット部に入る気はないか？」

そつえばこの先生はバスケット部顧問だったような気がする。

『なるほどね……』

おそらく晁燈はバスケット部の部長なのだろう。

……きつとこの教師は何としても自分をバスケット部に入れようと
する。

晁燈と話しをするなら……

「いえ……今もう勉強で手いっぱいなんです。」

「でも今の成績なら大丈夫だろう？それにバスケで優秀な成績を取れば内申もとれるぞ？」

「……また……考えてみます。」

そういうところの教師は悔しそうな顔をしたがすぐに表情を戻した。

「そうか、じゃあ良い答えを期待するよ。」

香喃は小さく笑って教室へと帰った。

「おい西蒹！ちよっ……」

追いかけてくる晁燈を無視し、香喃は家路を急ぐ。

『……しつこい』

今日は6時まで帝王への報告があるのだ。教室での質問攻めが予想以上に響いたのだ。

腕時計を見ると今は55分。家までは歩いて10分もあるのに。

『……巻かなきゃ。』

空を飛ぶにしてもここでは人が多すぎる。

香喃は大きなため息をついて走り出した。

晁燈の話なら明日にでも聞けばいい。

「ちよっと待ってて！無視すんなよ！」

晁燈の声が聴こえたが香喃は道路を渡る。

息をついて後ろを向いた瞬間、少し乱れていた呼吸が一瞬で止まった。

晁燈が道路を渡ろうとした瞬間、大型のトラックが晁燈の目の前に迫っていた。

「真田君！！」

「うわ！？」

急いで渡ったのだろう。運転手の方も狼狽し、ブレーキを踏めない。

キヤーっという悲鳴があちこちから上がる。

『あんの馬鹿!』

香喃は手首を隠すようにして魔力を解放した。そして自分はトラツクの前に行き晁燈の服をひつつかむ。

「r a f a g a (突風)！」

押し殺すように叫んだ言葉は形をもち、凄まじい風が2人をトラツクの前からはじき出す。

香喃は勢いを殺すためまた魔力を使い、2人はガクンと壁の数センチ前で止まった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

晁燈は過呼吸になりかけ、何とか自分の口をふさぐ。

香喃は埃を払って立ち上がった。

「・・・6時2分・・・」

がつくりとうなだれ、帝王の長い嫌味を思い出す。

「・・・大丈夫?」

「・・・あ・・・ああ。」

晁燈に手を差し出し、立たせるとカバンを拾って渡した。

「私帰るから。怪我はないよね?ちゃんと道路渡るときくらいは左右を見る事。」

香喃はそうとだけいい、全力で家に向かって走った。

「10分の遅刻だ。」

香喃は下がりにながったテンションのまますみません、と口ごもる。

「まー、ラナもそんなつもりはなかったんじゃないんじゃないですか?」

ガザが助け船を出してくれ、香喃はパツと顔を上げた。

ガザは今では帝王の右腕だ。こうした進言もできるようになり、帝王の一番の部下になった。

「・・・まあ良い。様子はどうだね？」

香喃が自分の母校である高校へ再度入学したことは訳があった。

例えば、生物の異常発生や、天候の急激な変化など、”人間界”では科学的な解明をなされている物も、実は魔界に問題があったりする事もある。

生物の異常発生は魔界と人間界での時空のひずみの発生のため。魔界と人間界の時間の流れは不規則に違い、生物が魔界で異常に繁殖し、人間界へ突然押し出されると異常発生が起きる。

天候の変化のほうはもっと簡単で、2つの隣り合った世界で魔界で戦いなどが起きると使われた魔法の炎や冷気が人間界へと伝わってしまう。

しかし今回はもっと厄介だ。

人間が突然いなくなる事件が発生している。しかも同じ市、偶然か必然か、それは香喃の故郷だった。沙捲のいなくなった今、香喃はそこへ行くと古傷が開くような気がしてなかなか足を運べていなかった。だが仮にも2人で暮らして、それ以外にもたくさんの思い入れのある地だ。

話を戻すでしょう。その集団失踪を人間界のメディアは誘拐だと言っているが若干違う。

確かに誘拐は誘拐なのだが、連れていかれた場所が地球上には無いのだから。

今年・・・いや、去年？で10人単位で7件ほど・・・だったと思う。長く生きてきて人の時間の流れを忘れてしまうのが少し悲しい。

「今のところ何も起きておりません。邪気の様なものも感じられず、異常もないのです。・・・ですが、」

香喃の言うとおり今のところは何も無い。香喃に気づいているという可能性はゼロに近いが、それが原因なのかは解らない。

「？」

「一人、逸材と思われる人物を見つけました。」

無論晁燈の事だ。

「・・・磨けば光る。香喃はそう確信していた。」

「・・・お前が弟子を取ると？」

帝王は驚いたように言った。香喃はもう弟子を数十人送りだしてもいい年だったが一人も弟子を取ることにはしてこなかった。

何故だか解らないけど、きつとまた自分と関わった人が逝くのを見たくないのだ。

『守れないなら触らない方が良い。触れて壊すのが怖いならよらなければいい。』

「・・・いいえ。目覚めを施した後は他の魔術師へと託します。」

「そうか・・・」

「弟子取ればいいのに。」

ガザがぼつりと漏らす。

「いえ・・・でもまだ・・・」

香喃は数百年たった今もまだ心の整理がついていなかった。

たぶん一生つくことはないだろうと自分でも思っている。死んでやっと安心するのだろうと。

「いいのだよ。お前の好きなタイミングにすればいい。」

「はい。」

「その逸材とやらはお前の好きなようにすればいい。弟子が欲しいという奴等は何人でもいるのだ。」

「わかりました。」

「・・・良い知らせを待っている。」

「は。」

小さく俯き、香喃は低いうなりと共に魔界から出た。

序章（1）（前書き）

今更ながらタイトルを変えてしまいました（・・；）
ここで言う序章は、晁燈が香喃の弟子になるまでのお話です。

序章（1）

序章（1）

「……お早う。」

背後に居た晁燈に言った。

「わっ……!？」

こっそりと近づいてきたつもりなのだろう。

びっくりしたように目を瞬かせていた。

人のこっそりと魔界の生物のこっそりは”まったく”違う。

晁燈のひそめていたつもり息は逆に他の人と違って不規則で目立つし、足音にも普通に歩いているのならできるはずのないムラができる。

それなら普通に近づいてきた方がまだいい。

・普通に近づいてきたところで香喃が気づかない事はまずないのだが。

「……えーっと……」

満員の電車に押し込まれるようにして乗って、晁燈が口を開いた。何も云わない香喃に戸惑っているようでそれ以上何も言えない。

「……怪我は？」

仕方なく香喃が口を開くと晁燈がピクリと身じろぎした。

「え?いや、ない。なかった。」

「それならいいの。……ついたよ。」

人の間をすり抜けるようにして行ってしまふ香喃を追いかけるようにして慌てて晁燈も後に続いた。

「~~~~なわけなのです。~~~~について~~~~」
もう15分は続いているであろう校長の話にうんざりし、香喃はあくびをかみ殺す。

「~~~~というわけで、長くなりましたがお話はここまでです。」

『ほんつと長かった・・・』

「今日は新任の~~~~」

『まだ・・・?』

また口を開いた校長にがつくりと頭を垂れる。

「坂本千秋先生です。」

「え・・・?」

香喃は小さく声を上げてしまった。

慌てて俯き、無い無い、と心の中で否定する。

『きつと女の先生だよ。だって千秋先生って700年前の・・・』

その希望と云うか、考えは無残に打ち砕かれた。

「ごーも。剣道部の顧問やらせてもらいます。」

香喃は顔を隠すようにして俯いていた。だがその抜けた喋り方と声に心当たりがありすぎてチラリと上を見る。

「っ・・・」

『・・・どうして・・・』

絶望にも似た気持ちを抱え、香喃はもう一度顔を確認する。

・・・紛れもない千秋だった。香喃が剣道部員だった時の坂本千秋。ゆるーいキャラと面白い人柄で人気のあった坂本千秋。容姿端麗でやるべきやっぴかりやることで評判の良かった坂本千秋。

啞然として見つめているとぱちりと目が合った。

その瞬間、千秋の目が零れ落ちそうなくらいに見開かれる。

「お・・・お前！」

香喃はヤバい、という表情で小さく首を振った。

「……」

千秋はそれが分かったらしく小さくうなずいて咳払いをした。

「えー、じゃあれからよろしくお願いします。」

こうして朝礼が終わるとともに、香喃の面倒事がまた一つ増えたのだった。

「……どういことだよ。」

「……どういことですか。」

お互い再開を喜べるはずもなく、何度も顔を確認し合う。

「……そつちからどぞ。」

「……魔術師なんですよ。あなたの生徒だった高校2年の時から。」

「……俺も同じようなもんだ。」

千秋は細々とため息をついた。

「魔術師ですか？いつから？」

「いんや・俺は純潔のヴァンパイアだね。かれこれ1200年。1200年……！」

香喃はその数字に驚いていた。香喃が魔術師になる500年前から生きていたのだ。

驚愕の表情をしている香喃にはつの悪そうな顔をして千秋は口を開く。

「あー……血は吸わねえぞ。偶に生肉食うぐらいで今の生活はやって行けるし。」

「……いえ、そうじゃなくて……。血を吸うのは別に平気なんですけど……私が魔術師になった時、気づかなかったんですか？」

血を吸われた経験もある。べつに千秋が望むのなら血ぐらいいくらでも提供してやる。

香喃が驚いたのはそっちではないのだから。

「まあちよいちよいな。あの紅桐沙捲つてのは完全にそうだと思っ
てたけど。魔力バンバン使ってたしな。お前はただ単にそういう”
人間”だと思ってた。靈感が強いとかその程度な。隠してたんだろ
？」

香喃はハツとした。

虹の魔力が当時の力で押さえられているわけがないのだ。

『・・・沙捲さんが・・・』

沙捲が隠してくれただろう。だからそれほどまでに魔力が強
くなかった沙捲の方が目立っていた。

今は亡き人を思い出し、なんとなく目をそらす。

「あいつはどうなったんだ？一緒じゃねえのか？」

香喃はどんな表情をして良いのか分からなくて困ったように千秋を
見る。

「・・・亡くなったのか。」

その様子で全てを察してくれたらしく千秋はその話を切り上げた。

「あーびっくりした。俺の顔知ってるやつなんてこの世界にいねえ
と思ってたからな。」

「・・・私もです。」

2人で何と無く笑い、話しをしているとチャイムが鳴った。

「次は数学だぞ。・・・また放課後話そうぜ。」

「・・・千秋と何話してたんだ？」

なんでも聞いてくるところが蓮とちよつとだけ似ているような気が
して香喃はくすくすと笑った。

「んだよ？」

「ううん、なんでもない。千秋先生とは部活の話。こうこ・・・中

学では剣道やってたから。」

高校、と言いきりそうになって慌てて口をつぐむ。

「剣道部入るのか？」

「うん．．．まだ迷ってる。」

授業中という事もあって晁燈は声をひそめて聞いた。

「何と何に？」

「．．．剣道か、バスケか。」

「．．．バスケ部入れ。」

狙い通り誘ってきた晁燈に内心ほくそ笑んで口を開く。

「バスケ楽しい？」

「ああ。上手いくいくようになるとな。西兼はもうそのレベルだと思っけど。」

「そうかな．．．。また見学行ってみるから教えてね。」

ちらちらとこちらを見るバスケ部の顧問兼数学の教師の視線に気づき慌てて二人は授業へと戻った。

放課後、香喃はとりあえず約束通りバスケ部を見ていた。

晁燈は練習に熱中しているらしく香喃には気づかない。だがバスケ部の顧問は香喃にすぐに気づき、ボールを持たせた。

「試しに一試合やってみよう。」

「え？」

唐突に言われ視線を上げると顧問の先生は穏やかな笑みを浮かべて言った。

「バスケの中で一番楽しいのはゲームだから。見てるだけじゃ楽しさは解らんよ。」

「え．．．あ．．．はい」

つい返事をしてしまうと先生は素早く部員を集めた。

逃げようにも逃げられなくなってしまった香喃はしまった、という

表情を押し殺した。

「バスケ部の見学に来たんだ。せっかくだからゲームをやってみよう。」

香喃は自動的にチームに振り分けられてしまう。

『うわー・・・』

心の中でため息をついた。

晁燈とは敵同士。とうの晁燈はわくわくと闘志を燃やしているようだ。

香喃は極力目立たないように隅っこにいた。

まず晁燈のクラス以外の人間は香喃の動きを見ていないし、新入部員以下の人間にパスが回ってくるわけがない。

ちらりと得点版に目を向けると28対30。

そこそこだが香喃のいるチームは負けている。きつと残りは一分ほど。

今晁燈がボールを持っているので逆転は無理だろう。

その時、先生がコートの外から叫んだ。

「おい！西兼にパスを回せ！」

「は!?!」

晁燈のこぼれ球を取った生徒が声を上げた。

「え!?!」

香喃自身も素つ頓狂な声を上げたがさすがはバスケ強豪校。一瞬で

香喃にパスが回ってきた。

「わ・・・」

慌てて受け止めゴールへ向かう。

香喃は何故か楽しくなってきた。まるで時が戻ったように感じて全身に生き生きとした活力を感じる。

人の間をすり抜ける。伸びてくる手を、足を、身体を避けてその先

へ。

息を吐く瞬間も、手を動かそうとする筋肉の伸び縮みも、香喃には解っていた。

・・久しぶりに”生きている”と実感した。熱くなる体も上がる息も、自分が生きているという証しだ

『楽しい・・・』

思い切り足を踏み出した瞬間、バツと何かが目の前に飛び出した。

「っ・・・」

慌てて右へと避けるが晁燈も同じように手を広げて先へ行くのを阻止する。

2人の間にはだれも近づけず、トントンというドリブルの音だけが響く。

抜けようとする香喃を追いかけける晁燈。香喃はその動きを見て晁燈の瞬発力の良さに舌を巻いた。

残り時間が少なくなっていく。

香喃は自然と口角があがっていつてしまっのわかった。

トクトクという心臓の音が聞こえる。晁燈は息があがっているようでもっと荒い。

晁燈が息を吐いた瞬間素早くフェイントをかけ、香喃は晁燈の脇を潜り抜けるようにしてゴールへと向かう。

『入れ・・・！』

そう心で叫び、スリーポイントラインからボールを投げ込む。

香喃の手からボールが離れた瞬間終了を知らせるホイッスルが鳴り響く。

ボールは綺麗な放物線を描いて行った。

ドクン。

香喃の心臓が脈打つ。走って荒くなった心拍とはかけ離れた重い重い脈拍だった。

ザッ

ボールはリングにあたる事もなく、綺麗に網を揺らした。落ちてきたボールを受け止め振り向くと晁燈が悔しそうな顔をしているのが解った。だがそれは香喃の能力を羨むのではなく、自分の力量不足と試合に負けた悔しさだ。号令がかけられ、香喃がボールを返すとワツとチームメイトが群がる。だが香喃はそれをなんとか振り切って先生に礼を言い出て行ってしまった。

晁燈は目に見えて沈み込んでいた。

チームメイトの田代が隣にどっかりと座り込むのが分かる。

「おい晁燈。なに落ち込んでんだ？」

「・・・べつにー・・・」

「抜かれたからか？」

「・・・」

マネージャーから受け取ったタオルを頭に向け、水を流し込む。

「あの子上手いよな。男子にも通用するぜきつと。」

「・・・」

『抜かれたの初めてだ・・・』

シヨックを隠しきれず晁燈ははあ、とため息をつく。

「あゝもう泣くな泣くな！」

田代がいたずらっぽく大声で言う。

「はあ！？泣いてねえよ！」

「わあつてるよ。」

げらげらと笑う田代を見てなんだか馬鹿らしくなってしまった。

「お前西兼と同じクラスだろ？ぜってえバスケット部入れる。全国取れるかもしれねえぞ。」

「うん……」
晁燈があいまいな返事を返すと今から行って来い、と田代に背中を叩かれた。

「よ。」

「……どうも」

理科室で千秋と香喃は落ち合った。

「コーヒーが出され、香喃は小さく頭を下げた。」

「……今は何やってんだ？」

「術師ですよ」

「そうじゃなくて、なんでこの学校に来た。」

千秋の言葉は疑問の意味を持っていなくて、香喃は千秋が訳を知っている事を悟った。

「……きつと先生と同じ理由です。」

「……目的は同じってわけか」

「それなら一緒にやりましょうよ」

「……そうだな」

そう言ったのを確認し、香喃はカッターナイフを取り出した。

「……それは……」

千秋はその気配に気づき怪訝そうに眉をしかめる。

「わかりますか？」

「切るのか？」

「ええそうですね」

”切る”というのは単に物を切るのではない。

空間を切りとり時空の狭間をつくる。そこから魔界へと一発で行けるのだ。

その空間を切り取れる刃物はなかなか作れない。だが香喃は自分の魔力の一部を注ぎ、それをつくることに成功した。

「帝王様のところですよ。一緒に来てください」

「・・・わかった」

千秋が狭間へと足を踏み入れ、そして香喃が入ろうとした。その時だった。

「嘘だろ・・・？」

茫然としたような声が聞こえ、2人は振り返った。

「ツチ・・・」

「真田君！」

「何だよそれ！？」

狭間を見て晁燈が問う。だが千秋は香喃の腕を強引に引いた。

「逃げるぞ！」

「でもっ・・・」

「どうせ”消しちまえば”問題無い。」

さらっと漏らしたその一言に香喃は硬直した。

そうだ、こういう世界だという事を忘れていた。邪魔ものを消すことなど特別なことではないし、当然の道理だ。

『でも・・・！』

「ダメ！」

「仕方ねえだろ」

千秋は晁燈を文字通り”消そう”と解剖に使うメスを振りかざした。

「ダメよそんなこと・・・っ！？」

香喃が思わず言った瞬間、晁燈が突っ込んできた。

「きゃ！」

「うお！？」

「うわあああああ！」

三人は思い思いの悲鳴を上げて狭間の中へと落ちて行った。

序章（1）（後書き）

今日やっと学園祭が終わりました・・・。
めっさ疲れた。

そんなわけで今まで投稿できていなかった一話を投稿。
もしかしたら用語のところを編集するかもしれない。

序章(2)

序章(2)

ぐんぐんと地面がせりあがってくる。

3人は凄まじいスピードで落下していた。

「うわああああ!!」

「掴まれ真田!!」

千秋が晁燈を捕まえ香喃も一緒になる。

「どうにかしろ!!」

「どうにか、ってどうしろっていうんです!!?」

「魔力でもなんでも使え!死ぬぞ!!」

「ぎゃあああ死ぬ!死ぬって!」

「うっさい!そんなに死にたいの!?!」

「うわ!こええ...」

香喃がそれだけ言うと晁燈は自分で自分の口をふさいだ。千秋がひくりと頬をひきつらせる。

阿鼻叫喚のこの事態に、香喃は逆に頭が冷めて行くような気がした。風で感覚の無くなっていた指先に力が戻る。

スツと頭の熱がひき、香喃はきつく目を閉じた。

『落ちつけ...落ちつけ...!』

ええとどうすればいいだろうか。

『風を...』

ダメだ。呪文がとんでいる。

あと1キ口。700、500、...

どんどん距離は短くなっていく。

「Lluvia!!」

「・・・何のつもりだ？」

何も起こらない。千秋は焦りの交じった声で問う。
もう地面までそう遠くないのだろう。

「・・・お願い」

香喃はほとんど神頼みの様に願った。

「？」

だが次の瞬間には神に願うには少々不躰な舌打ちをした。

「来なさいリウビア！！！」

そう鋭く叫んだ瞬間だった。

オオオオ・・・

何かの雄叫びのような風を斬るような音がした。

「もうだめだぶつかる！！！」

「っ！！！」

千秋と晁燈は目を閉じた。

だが香喃だけは二人をつかみ下を見据える。足がすくむ。といても立っていないからすくむ感覚もあまりないのだが。

「！！！」

香喃がにやりと笑う。遠くからありえないスピードで影が飛んでくるのが見えた。

ドツという衝撃と共に、3人は堅い物の上に着地した。

「よいしい子ね。」

香喃は上機嫌でその物を撫でていた。

「う・・・うわああ！！！」

晁燈はその物の正体を見た瞬間後ずさり始める。

「大きな声出さないで。響くの」
「よく叫ぶなあお前」

3人が乗っているのは雲の色をしたドラゴンの背中だった。香喃が背をなでる度、リウビアと呼ばれたドラゴンは満足そうに喉を鳴らす。大きさはそう・調度3トントラックほど。晁燈はずるとどんだん後ずさっていく。

「あ。」

千秋と香喃の綺麗に開かれる。

「え？」

「ここは”ドラゴン”の背中の上。当然終わりもあるわけで・・・

「え、ちよっ・・・」

「おっと」

千秋が落ちかけた晁燈を引つ張り上げる。

「嘘・・・嘘だろ・・・？こんな・・・ありえな・・・」

香喃は不敵に笑った。

「ありえるでしょ。今触ってるのは何？」

晁燈は手をつけていた背中をじいっと見る。

「説明は後にしようや。」

千秋が遮り香喃も頷いた。

「まずだな、ここはどこだ？」

千秋の問いに香喃はしばらく考え込む。

「きつと魔界と人間界の間ってとこでしょうね。」

「じゃあ早いところ戻ろうぜ。」

「・・・それが」

香喃のものの言いに千秋と晁燈の背に嫌な汗が垂れる。

「・・・まさか」

「そのままかです。ナイフは人間界にあります。」

「嘘だろ・・・」

千秋ががっくりとうなだれる。

「でも大丈夫ですよ。入ったところから出れば」

「空気が薄くてこいつがくたばる」

そういつて晁燈を指差す。

「・・・別に俺は良いがな」

そう付け足すと晁燈が目を見開いた。

だが香喃は首を振る。

「ダメですよ。そんなこと。それに私も体は人間なんですからね」

「ツチ・・・」

「狭間はいくつかあるはずですよ。下へ降りて探しましょう」

晁燈はただ何を言っているのか分からなくて困惑している。香喃はそれに気づいて晁燈の方を向く。

「ここは人の世界と隣り合った別の世界。何処かに出口があるはずだから、それを探して帰るの。」

「あ・・・ああ。」

言われるままに降りた晁燈を後ろに、香喃は歩きだした。

「で、さっきのドラゴンは何なんだよ？」

千秋が頭を乱暴に掻きながら聞いた。

「そのままですよ」

しれつと言いつ放つ香喃はいつも学校で見るより数段冷たいと晁燈は思った。

「どこで手に入れた。」

「師のドラゴンです。でも名前は無かったので私がつけたけど」

「Livviaってのは？なんで雨なんだよすつきりしないな」

「師匠の洋名がレインだったんです。」

ぶつきらばつな言葉には何かを堪えるような響きが合って千秋はそれ以上何も言えなくなつた。

「え？」

晁燈が小さな声を上げた。

「どうした。」

「？」

「あ．．．あ．．．あれ．．．！」

2人ともつられて晁燈の指さす方向を見る。

「あ？」

「え？」

「なんだありや．．．」

何かがちらへと来る。

元々夜の様に暗い地面にもっと真つ黒なインクを垂らしたような割れ目から何かか沸きだしてきていた。

「やべえぞ．．．．．」

千秋が低い声で囁く。

香喃はリウビアが持ってきた剣に手をかける。

「．．．ゆっくり後ろに下がれ」

晁燈の腕をつかみ千秋が言う。

「．．．足止めます。リウビアを呼ぶのでそれに乗ってください
い」

チャキツ、と剣を抜く音がやけに大きく響いたような気がした。

「までお前一人は．．．」

「じゃあ真田君を移動させてから来てください．．．」

周りの緊張感に飲まれ晁燈までじつとりと嫌な汗が背中に伝った。

香喃がその名を叫んだ瞬間、バツと”それ”は振り返った。

「走れ真田！！」

「っ！」

晁燈が走つたのを確認し、香喃は剣でおぞましい生き物を薙ぎ払う。

「っ．．．」

ビシヤツと振り返り血のような物が頬に飛ぶ。だがそれを拭っていては次は自分の血が飛ぶことになる。

『きりがない・・・』

裂け目からいくらでも出てくるそれに香喃は疲労を覚えて来た。

「っ!?!」

意識を他に移した一瞬のうちに香喃はぐい、と足を引つ張られた。襲い来るかぎづめを何とか剣で弾き、足をつかんだ死にかけのそれを踏みつぶす。

だがその隙を邪悪な化け物たちは見逃さなかった。

「グガアアアア!!」

「伏せる!」

千秋の声を微かに聞いたような気がして香喃はとつさに伏せる。グシャ、と鈍い音がし、ぼたぼたと血が地面に滴る。

「早くあのドラゴンに乗れ!きりがねえだろうが!」

化け物の頭を握りつぶし血にまみれた手で香喃の肩を強く掴む。だがその間にも化け物は2人に手を伸ばしてくる。

「っ・・・calor shock vague!」

「!?!」

『嘘だろこんな・・・』

千秋はビリビリと感じた衝撃とその熱に声も出せなかった。

『強すぎんだろ・・・!?!』

強い魔力に千秋は目を見開く。

『なんでこいつに』

「伏せて!!」

今度は香喃が叫ぶ番だった。

二人して地面に倒れ込むとその上を身を焼かれるような暑さと凄まじい衝撃が通って行く。

「グギヤアツ・・・ア・・・」

大した声もあげず、化け物たちは灰になった。

「逃げましょう!」

香喃がリウビアと目を合わすと石の矢のように落ちてきた。

「一緒に跳んでください!」

言われるがままにジャンプすると2人はあっという間にリウビアによって空高くまで運ばれていた。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

鞍にまたがった晁燈をよそに2人がゼエゼエと息をついていた。

晁燈の方はしつかりと手綱を握っており、呑み込みの早さがうかがえる。

「ゲホツ・・・ケホツ・・・ツ・・・」

「おいっ・・・ゲホツ・・・だいじょっ・・・ぶか？」

『息が・・・っ』

息ができない。千秋も多少それを感じているようだが香喃はもっとひどい。

「っ・・・そこ・・・！」

「え？」

「・・・その光に突っ込んで！」

「え？え・・・あ・・・わかった！」

晁燈は何とか手綱でリウビアをそこへと導き、光へと飛び込んだ。

序章(2) (後書き)

遅くなりました(; ;)

用語を編集します

序章(3) (前書き)

内容がとにかく薄いです。

序章(3)

茜の丘のその向こう(3)

「ハアツ・・・ハツ・・・ゲホツ・・・」
「おい大丈夫か!？」

香喃は地面に両腕をつけて屈みこむ。

喉を押さえてもヒューヒューという嫌な音しかない。

「あの血を浴びたのか!」

「・・・た・・・ぶん・・・」

「ツチ・・・おい城は何処だ!？」

「っ・・・?」

「人はいるんだろ!？」

香喃が何も云えずに小さくうなずくと千秋も力強くうなずいた。

「行くぞ。歩けるか？」

千秋の焦り様に晁燈もつられて緊張し始める。

「ツ・・・ケホツ・・・」

香喃は千秋に支えられふらつきながらも歩く努力をした。

「ツ・・・!ゲホツ!ゲホツ・・・ハツ・・・ケホツ・・・ケホツ!」

喘息の様に不規則な咳を繰り返し、立てなくなってしまった。

「ツチ・・・おい真田!」

「はっ・・・はい!」

「そこに建物が見えるだろ?人を呼んできてくれ!」

「わ、わかった!」

「・・・ノ。」

「?」

「レノと・・・ミラ・・・っていう・・・ひと・・・呼んで・・・ラナ・

アーシャが呼んでるって……言って……」

「わかった!」

何もわからないまま返事をし、晁燈は建物の方向を見据える。

「出来るか!？」

「おう」

晁燈がかけて行く後姿をぼんやりと見ながら香喃は咳を繰返していた。

10分ほど走った。

「ここ……だよな?」

晁燈は啞然として呟く。大きすぎる。ドアが何処かもわからない。

『急がないと……!』

「すいませーん!!!!!!誰かいますか!!!!!!?」

反応がない。ますます焦って晁燈はもう一度叫んだ。

「ごめんくださーい!!!!!!い!!!!!!い!!!!!!?」

その瞬間、銃声のような鋭い音がし、晁燈の立っている数歩手前の土が飛び散った。

「!?!」

「…….…….…….だれ…….」

「え…….あ…….あ…….あの!うわ!?!」

また音が響き晁燈のすぐわきの土がえぐれる。

「撃たないでください!!!」

「…….…….…….名を…….名乗りなさい」

「あ…….晁燈です!!!真田晁燈と言います!!!」

「…….…….」

しばらくの沈黙を置き、ギーツという気の軋む音がし大きな門が開く。

「入りなさい」

今までうつすらと響くように伝わってきた声は、門を開くとハツキリとした音となった。

「あの・・・！急いでるんです。すぐ向こうで俺の知り合いが具合悪くなっちゃって・・・！」

「・・・」

暗い中晁燈が目を凝らすと黒いマントに身を包んだ人物が見えた。

「あの！お願いします！急いでるんです！！こうしてる間にも・・・！！あのミラさんとレノさんって人いますか！！？ラナが呼んでるって言えって言われたんです！！！」

「・・・ラナ？」

「そうです！！！」

だんだんと焦りが募ってきた晁燈は早口でまくしたてる。

「ラナ・アーシャが呼んでるんです！！ミラとレノを呼べって言ってるんです！！変な化け物の血を浴びて息ができないみたいなんです！！！！お願いですから急いでください！誰か医者を！！！！」

「わかった。・・・レノ！！！」

マントの女性は大声で何かを呼んだ。そして何かを呟いた。すると手の上にパツと医療用のカバンの様なモノが現れる。それに気を取られていると背後からハツハツ、という犬の様な息使いを感じた。

「グルルルル・・・」

「え？」

「レノ、ラナちゃんが危ないみたいなの。行きましよう」

そう語りかけた相手は軽トラックほどもある大きな狼。

晁燈はわなわなと口を動かした後ずさる。

「あなたが・・・ミラ・・・さん？」

「ええそうよ！乗って！えつと・・・」

「晁燈です！」

「そう晁燈君。大丈夫噛まないから早く！」

半ばミラに引き上げられる様にして背中に乗った時には、狼は既に駆けだしていた。

「・・・楽になったか？」

「・・・イ。だい・・・ぶ」

背中をさすってもらい、香喃は短い呼吸を何度も繰返す。

「大丈夫だ・・・すぐに人が来る。」

「・・・」

香喃は頷く。だが小さな子の様に扱われ少しムツとしていた。香喃は大事に大事に700年強育てられた箱入り魔術師ではないし、それなりに経験を積んでいる。

いくら千秋が年上だからといってこんな風に扱われるのは慣れていない。

「ラナ〜!？」

遠くで小さな声が聞こえた。

「っ!」

「おーいこつちだ!!!来てくれ!」

香喃が叫べない事を悟り千秋が大声で応えた。

「れの・・・さん・・・」

ゴウツと風が吹き、気づくと目の前に大きな狼がいた。

「フェンリル!？」

千秋が驚いたように呟いた。

「あー違う違う。俺はフェンリルと人間のハーフ。」

そういつて2人を背から下ろしたレノは人の形になった。

「ほー・・・」

「あんたもヴァンパイアじゃないか。」

「ほらほら話しは後で。ラナちゃん大丈夫?辛いわね・・・」

香喃は身体に酸素がいきわたらなくなり、グツタリと身体のを抜いていた。

「城へ戻りますか。」

レノの言葉にミラは頷き、半ば気絶した香喃の上半身を起こす。

「あ、やりますよ。」

千秋はいかにも先生、という口調でミラから香喃を受け取る。

「背中に乗せてください。」

獣化したレノに香喃を乗せると千秋も促されるままに飛び乗る。

「こんなに乗れるんですか？」

「そうね、レノ、ちよっと狭いわ。」

「ガルルル・・・」

文句でも言う様に唸るとレノの体が少しずつ大きくなっていく。

「いいわ。急ぎましよう」

4人を乗せているとは思えない動きで、レノは城へと急いだ。

「私はラナちゃんに治療をするわね。あなたたちは別室で休んでいて。その・・・えーと？」

千秋を見てミラは首をかしげる。

「坂本千秋だ。千秋でいい。」

「はいはい、レノ、千秋さんと晁燈君を案内して。」

「おー。」

初めて完全な人型になったレノを千秋と晁燈はジッと見ていた。

「混血？」

「おうよ。とりあえず部屋に行くぞ。えーと千秋！あんたも血を洗い流した方が良く。晁燈はあそこから走ってきたんだろ？何か飲みもんだすから飲んでけ」

歩きだすレノの後を追いつ、2人も歩きだした。

「広・・・」

晁燈は思わず声を漏らした。

こんな広いところ見た事もない。普段行くような建物を遥かに超える大きさに半ば圧倒されるようだった。

「そうだろ？」そっち”じゃこんな広い建てモンないもんな」

レノが少し誇らしげに言った。

「誰がつくつたんですか？」

「帝王様だ。一番偉い人。魔法を生んだ人なんだぜ？」

フレンドリーな人だ、と晁燈は思った。しかし一見軽そうな雰囲気にとらわれそうになるが瞳には長年の経験がにじみ出ているような気がした。あまりにも深く、奥が見えなくて。

晁燈はレノの考えが全く読めない原因がそれだと気づいた。

建物の中だというのに部屋に辿り着くのに10分もかかった。

部屋に入り、晁燈は勧められるまま疲れた足を放りだしてソファーに座った。

ふとクツションが沈み込む感触を憶え、そちらを見ると千秋もソファーへと腰かけていた。

「なあ”ハーフ”」

ほどなくして晁燈はレノが混血、と言っていた事を思い出し意味を理解した。

「・・・俺はレノって名前があるんだよ。」

レノは不機嫌そうだ。

「ああ悪かった。なあレノ。お前は混血だろう？」

「だからなんだ？」

「その・・・俺たちの世界では混血ってのは嫌われんだよ。ここはどつにもならないのか？」

「ああ。帝王様が無くした」

「そうか・・・」

千秋は何処か遠い目をしていた。

レノはしばらく千秋を見ていた。何の造作もないことだ、と晁燈が目をそらそうとした瞬間、ボウツとレノの手首が光った。

「？」

晁燈が目をもう一度そちらに向けるとレノがまっすぐと千秋を見つめていた。するとレノがこちらを向く。その瞬間、晁燈の背中にゾツと何かが走った。

本能的に、何もしていないのに全てを見透かされそうな気がした。

「あんたも辛い思いをしたのか」

レノが千秋に呟く。

「あ？」

千秋は喉の奥から低い声を出した。

「悪い。気になっちまって」

「・・・」見る”才能があるのか。悪趣味だな」

「悪い」

晁燈は訳も分からず眉をひそめた。その様子を見て千秋が口を開く。

「あんな、魔力には・・・」

「よせ。魔術師以外に魔術の事は言つな」

「掟か。」

「そんな感じだ」

晁燈は多少の不満があつたが立場上何も言えない。

「・・・賢いなお前」

ふとレノが呟く。

「え？」

「いやなんでも。ラナの様子を見てくる。」

そういつてレノは無言で出て行ってしまった。

「なんか・・・怒らせたかな？」

「お前じゃない。おれがだ」

千秋は渋い笑みを口元に浮かべ苦笑した。

「？」

「・・・無事に帰れるといいな」

さっきまで自分の事を殺そうとしていた男の言葉じゃない。

晁燈はこの言葉が話題をそらすためだと気づいた。

「そうですね・・・」

とりあえずそう返事を返し、疲れ切った身体を休めるため深くソファにもたれた。

序章（４）

序章（４）

「ん……」

声にならない声を聞いた喉の奥から漏らし、香喃は目を覚ました。

『……どこだここ』

香喃はぼやけたままの目を薄く開けて部屋を見る。

明るすぎて目が痛い。

とりあえずベットに寝かされていることから自分は助かったのだらう。

『ミラさんの部屋だ……』

あの時、遠くからミラが自分を呼ぶ声が聞こえたところから記憶がいまいになっている。

「……ケホツ……」

喉が痛い。

というか身体に酷い倦怠感があった。

きつと千秋の言うとおりのあの化け物たちの返り血を大量に浴びたのが原因だろう。

身体のどこかの傷口から入ったのだろうか。

とりあえず生きてて良かった。

『先生たちは……』

そうおもってベットから身を起こし、そろえられたスリッパにはだしの足を入れる。

「えっ……!?!?」

体重をかけた瞬間、ひざから崩れ落ちた。

しばらく事が理解できなくて、頬に触れた床の冷たさで我を取り戻

した。

『……た……た……立てない？』

いやいや、それはいくらなんでも、と香喃は再度立ち上がるうとするが足腰にまったくと言つていいほど力が入らない。

こんな経験800年弱生きてきたなかで初めてだった。

「……」

『どうしようか……』

床に這いつくばったまま途方に暮れる。冷たい床が元々冷えていた身体に痛いほど染みて香喃は無理矢理身体を起こしてベットにもたれかかった。

さてどうするか。お尻は冷えて来たし、クーラーが入っているんじゃないかってくらい寒い部屋のせいで指先は感覚がないし、それによくわかんないけど吐き気がするし。

その時、ドアのすぐ向こう側でコツコツという足音が聞こえた。

『通り過ぎちゃーうー！』

呼ぼうか呼ぶまいかぐずぐずしていると足音はドアの前を素通りしていこうとする。

「あ、あの、すみませーん！」

ぴたりと足音がとまり、またドアへと引き返してきた。

ガチャリとドアが開く。

「あー！」

「え！？」

2人は目を合わせて互いに絶句する。

「希ちゃん！」

「香喃ちゃん！？」

突然の再開だった。

香喃が魔術師になるための試験で助けたガザの弟子。

佐賀希。

香喃と同じ年の魔術師だ。

試験の時からちよくちよく一緒に遊んだり話したりはしたが沙捲が死んだ後は香喃がふさぎこんでしまったことに気を使い、しばらく会わなかった。それきり香喃が住む場所を変えたりしたため音沙汰無しの状態になってしまっていたのだ。

「うわあ久しぶり!!」

ぎゅうつと香喃の身体を抱きしめ、希は歓喜する。

香喃も抱きしめ返してやりたいところだが力が入らず弱く背中を手を回すにとどまった。

「やっと逢えた!!」

希は嬉しそうに言う。

『?』

「あ・・・あのさ、ミラさん呼んできてくれる?」

「あ、うん! えつと・・・どうしたの?」

「ちょっとドジっちゃって。身体が動かないの」

「えつとく・・・じゃあ・・・」

希はキュッと目を閉じ、口を動かした。

「mistletoe brachium」

言い終えるとともにメキメキと床から何かがあがってきた。

「うわ・・・」

上がってきたのは柔らかな蔓だ。しなやかで美しい蔓が堅い床を突き破り、ふわりと鈴羅を包んでベットへと戻し、そのままそくさと地面へと戻って行った。壊れた床は何事もなかったかのように治っている。

「すごい・・・」

「ふふ、ありがとう。姉さんから教わったの」

「ねえさん・・・?」

「ミラさんの事。ホントの姉妹じゃないけど、師匠と仲いいからいつの間にか・・・ね?」

「へえ・・・」

香喃はなんだか嬉しくなって頬をほんのりと染めた。

「すごいでしょ、今の。姉さんは植物と仲が良いから。」
香喃は怪訝そうに眉をしかめた。

「仲が良い・・・?」

「ほら、魔法の相性ってあるじゃない? 姉さんは植物と相性がいいし、私もそうらしいから今はミラさんのところで薬草と地理の勉強中」

希はにっこりと笑ってウィンクをした。そうは言っても魔術をここまで使うのは大変らしく少し疲れた表情をしていた。希の魔術の色は紫だ。

「私はまだ未熟だからこれしかできないの。あ、ごめん、姉さん連れてくるから待ってて! 後で話せる?」

「うん」

「じゃあ待ってて!」

希はいつも明るい。

『私もあなればいいのになあ・・・』
希と比べたら私はどうなるのだろうか?

太陽とブラックホールくらい違うのでは?

一人でそんな事を考えて失笑を漏らす。

でも偶にあんな明るさがうらやましくなるのは事実だ。

「あらあらラナちゃん! ごめんなさいね大丈夫?」

すぐにミラがやってきて香喃に数錠の薬を手渡す。

「これは・・・?」

「解毒剤よ」

「え!?!」

希が驚いたように2人を見る。

「そんなひどいの!? 香喃何したの?」

「一人で怪獣の相手して毒素入りの返り血を散々浴びたのよ」

ミラの口調はしょうがないわねえ、と呆れる母親のようだった。

「あ・・いえ、一人じゃないんですよ?」

「えーでもすごい! やっぱすごい!」

希は香喃がミノタウロスから自身を救った時から何故か妙な尊敬を香喃に向けている。

「さて、まだ身体の中に毒が残ってるから身体も動きにくいでしょう? ちゃんとお薬飲んで半日休めば大丈夫よ」

「ありがとうございます。あの・・・晁燈君と先生の方は?」

「別室で休んでるわ。学校の方はガザがごまかすって」

「どうしても半日休まないとダメでしょうか?」

ミラはまたお母さんの様な顔つきになった。

「だーめ。動くとそれだけ身体に毒がまわるのよ。寝てなくてもいから休んでなさい。ルルディ、見てくれる?」

「・・・?」

ミラが出て行く。

『ルルディ・・・ルルディってだれ?』

「ねえ香喃。おしゃべりしようよ。」

香喃は暖かな布団にもぐったまま希に聞いた。

「ねえルルディってあなたの・・・?」

「あ! そうか言ってなかったよね! 私の洋名。ルルディ・シルワが私の名前。」

「ルルディ・・・シルワ・・。花の森?」

香喃が呟くと希が嬉しそうに笑った。

「そう！ルルデイがギリシャ語で花でシルワ（silva）はラテン語で森！帝王様が付けてくれたの」

「可愛い」

香喃がクスリと笑うと希もニッコリと笑った。

「呼ぶならルルって呼んで。みんなそうなの。」

「ううん、希でいいよ。似合ってるけどね」

香喃が笑うと希もつられて笑った。だが何故か完全に笑っていない。

「どうかしたの？相談事？」

「ううん・・・振られたっ！」

「え？誰に？」

事の唐突さにびっくりして聞き返した。

「レノさん！」

「はあ！？」

香喃の声が裏返る。

「だってかっこいいもん！高嶺の花だって解ってるし、だけど好きなんだもん」

「そっか・・・まあかっこいいよね」

確かにレノは沙捲と似て端正な顔立ちをしていたし、兄の様なやんちゃだが優しい性格で好きになる理由は充分すぎる。

「・・・なんでだろう？」

ふと香喃が呟く。

「え？」

「希なら絶対OKすると思うもん」

「でもだめだったよ・・・」

がっかりとする声が聞きたくなくて励まされなくなったが言葉が見つからない。

「香喃は？レノさんどう思う？」

「ううん・・・カッコいいと思うよ」

何と無く返すはずいつ、と迫られた。

「そうじゃなくて！好きかどうか！」

「す、好きだけど」

「友達として!? 異性として!？」

「そういえばレノを恋愛の対象として見れた事はない。」

『なんでだろう・・・?』

「うづん、お兄さんとして」

「へ?」

「いいお兄さんじゃない。兄貴って感じで」

「はぁ・・・」

希は呆れたという様に椅子に沈み込む。

「すごい仲いいのに」

「あの人は兄貴。優しくて頼れるお兄ちゃん」

『そっか・・・』

レノを男の人として見れないのはまだ沙捲の事を憶えているから。

もちろん蓮の事も。

レノの顔に兄の面影が見える度、少し切なくなるのだ。

「香喃はあれから男の人と付き合った?」

「付き合ってた人はいたけどあの後すぐに別れちゃったよ。もうそれからずっとない」

「そっかぁ・・・寂しくない?」

「・・・」

「・・・」

何も言えなかった。寂しい。でもそういう人をつくらないのは・・・

・

希はボスツと少々乱暴にベットの淵へと座った。

「ねえ」

「ん?」

「香喃は大人っぽいね。私も同じだけ生きてるのに、ずっとこんな」

笑っていたが表情は明るくなかった。

「そう? 希はそれでいいと思うよ」

希にはこのままでいて欲しい。大人になるためにあんな経験をする

のなら、私は子供のままで良かった。大人になる代償は大きすぎた。「でもね、香喃だけ最初に行っちゃうような気がするの。私の知らないところにさ、いつの間にか」

香喃はその言葉に小さく吹き出した。

だが希が心外だ、という表情をしているのを見て慌てて口元を引き締める。

「行かないよ。」

「うっん、ダメ。絶対そうなる気がするの。香喃が消えちゃう」

「そんな縁起の悪い・・・」

「今もそうだよ」

香喃が驚いたように瞬きを繰り返すと希はじいっと香喃の事を覗き込んだ。

「今も・・・香喃は私の知らないところで怪我して、大変な目にあつてさ。今じゃなくてもそう。・・・師匠から聞いたの沙捲さんの事」

その名前が出た瞬間、ズキッと胸が痛む。それは新に刺された傷のせいなのか、心に負ったそれよりも大きな傷なのか。

「・・・悲しかったでしょう？香喃。私もあなたみたいに沙捲さんと一緒にはいかなかったけど、聞いた時すごく哀しかった。でもね、今あなたと会った時にそんな事なかったみたいに見えたから、すごく怖くなったの。香喃は私の事も覚えていないんじゃないかって。でも違うよね。それは沙捲さんの事だってそう」

忘れてなんかいない。

ただ、忘れたいと思ったのは事実だ。

あの人になんか逢わなければこんな痛み感じなくて済んだのに。

思い出に足された人がただ消えただけなのに。頭で分かっても心がこねる。

心に開いた喪失感の穴は・・・

きつと一生消えない。

でもそれを私は人に言うことはない。
自分の問題なんだから。

・・・だから・・・こんなこと話したくなかった。

「寂しいよ？」

香喃は小さくつぶやいた。

「え・・・？」

「付き合ってる人がいなくて寂しくない？って質問」

数秒後希が唇を尖らせた。

「遅！今まで考えてたの？」

「まあね・・・興味ない？」

言うか言うまいか悩んでいると希が驚くべき速さで口を開く。

「聞く！」

「もし・・・」

香喃は言い淀んだ。

「もし大切な人ができてね」

「？」

「その人がいなくなったらどうしよう、って考えるの。そんな悲しい思いをするなら、もうそんなことしなきゃいい。」

希が複雑な表情を見せる。

「どうせいつか居なくなるなら、親しくなんてしなきゃいい。いなのは寂しいけど、いなくなるのはもっと寂しいの。」

「違うよ・・・」

何かを押し殺したような顔で希は言った。

「違うよそれ。逃げてるだけじゃん。」

「？」

「沙捲さんに出逢わなきゃよかった？」

「・・・うつん」

「じゃあ意味ないじゃん。」

希が嬉しそうに笑うのを見て、香喃もつられて微笑んだ。

「・・・私より希の方がずっと大人だよ」

2年前・・・

「あー・・・悪い。」

くしゃくしゃと頭をなでられ、一瞬期待したがその言葉に俯いた。

「泣かないでくれよ・・・な？」

「はいっ・・・」

だがぼろぼろと流れだす涙は止まらなかった。レノは困ったように顔を上げさせる。

「ルルの気持ちは嬉しいよ」

「・・・なんで・・・」

「俺、今付き合える状態じゃないんだよな。」

レノはハンカチで希の涙を拭う。

「え・・・？」

「苦しんでるやつがいるのに自分だけ恋愛ってのは少しおかしい気がしてね」

「香喃の・・・？」

『苦しんでるの？香喃・・・』

希は友達がそんな状況にあるのに何で励ましてやらなかったのだからと深く後悔した。

「そーだね。シルワみたいな良い子が告白してくれるのはすんごく嬉しいけどね。俺あいつのこと支えてやりたいんだ」

「・・・付き合って・・・るんですか・・・？」

「いんや。」

レノは恥ずかしそうに頬を染め、希の手にハンカチを持たせた。
「ほら目え腫れちまうだろ？ちゃんと拭いて水で冷やしな。かわい
ー顔が台無し。今日はごめんな。」
悪戯っぽく笑いレノは行ってしまった。

一人残された希はしゃがみこんでむせび泣いた。
レノに振られた事ももちろん。
それに香喃の事も

そしてミラに弟子入りした。
香喃とミラは仲が良かったから・・・きつと香喃が帰ってくる時をし
っているし、何よりも力をつけたい。
もうこんな思いを大切な友達にさせないように・・・

序章(4) (後書き)

希ちゃん再登場!

レノさんには振られたけど希ちゃんは充分良い女です!

用語を編集します。

序章(5)

序章(5)

「……………よっし」

小さく気合いを入れ、眠ってしまった希を起こさないようにベットから抜け出す。

「ごめんね……………」

『……………晁燈をどうにかしないと』

さすがはミラの調合した薬。多少違和感はあるが今度はきちんと立てた。

「……………」

またまたさすが。ミラは香喃の行動パターンなど見透かしていた。がっちり南京錠がかかっている。だが甘い。

……………これしきの事であきらめる西兼香喃ではない。

諦めの悪さに至っては自分でも嫌になるほど。

「bird of prey-talon」

メリツと嫌な音を響かせ突き出した人差し指が形を変えて行く。

恐竜の様な皮膚に堅く鋭く巻いた爪。

『うわー気持ち悪!』

声には出さなかったが思わず眉をしかめた。これをやったのは今回が初めて。でも気持ちの悪さだけは他人からさんざん聞いていた。その筋骨隆々となった指を南京錠にひっかけ、上から部屋にあったタオルを巻きつける。

『せーのっ!』

ボキンッ

「ん……………」

鈍い音がし、折れた金属がタオルの上に落ちる。その瞬間希が小さ

く声を上げた。

大分音はこもってくれたがダメか……？

「スー……スー……」

再び穏やかな寝息を確認すると香喃はごつい指を見て小さなため息をつく。

「liberation」

スツと指は元に戻り、香喃は息をつき廊下へと出て晁燈達を探し始めた。

「真田くん……真田君……」

声が聞こえる……。

「ん……？」

懸命に意識を覚醒させようと瞬きするが眩しすぎて目が開けられない。

「眩しい？」

「うん……」

スツと目の前が影になる。

ああやつとコレで目が……

「わっ……わあああ!？」

超至近距離に香喃の顔が合っと思わずのけ反る。

「しー……」

唇に指を立て、叫ぼうとした口に手のひらを当てる。

「んぶっ……」

口をふさいだままコクコクと首を振るとそつとその手を離してくれた。

「荷物まとめて。帰してあげるから。私は帝王様に先生と一緒に報告をしてくる。千秋センセどこにいるかわかる?」

なんでそれだけなのに静かにする必要があるのだろうか
「あー・・・ちょっとお忍びなんだよね。だから静かに」
「なるほど・・・千秋先生なら闘技場に・・・って・・・え!？」
『・・・なんて言いたいことが分かるんだよ・・・??』
「うんわかつたありがと」
香喃も沙捲と同じように読み取る魔力に長けている。
強く想った事なら意識せずとも伝わってくるのだ。
晁燈はそれを問い詰めようとしたがまた静かに、とジェスチャーさ
れ、部屋を出て行かれてしまった。

香喃は闘技場に來ていた。

城の闘技場は非常に広く見つけるのは困難と思えたがそれは違った。
「おおおー!!!」
人だかりから歓声が時折響いてくる。
予想はついて、香喃は帯刀していることを確かめて人ごみを掻きわ
ける。

「てめっ・・・なかなか・・・」
キンツと金属のぶつかる高い音が響く。

「お前も・・・なっ!!!」

「・・・なにかっ・・・やって・・・たかっ!？」

「たりめーだ・・・っ・・・剣道部・・・顧問だからなっ!!!」
ギインツとレノの剣がはじかれる。

『レ・・・レノさん(呆)・・・先生(呆)』

香喃はハア とため息をついた。

何をやっているのだから・・・

ギインギインツと打ち合いは激しさを増し、だんだん2人にも余裕
がなくなっていく。

あれ、これもしかしたら危ないのでは？

と思ったが歓声はやまず、2人の目が本気になっていく。

「あぶなっ！」

その時だった。ぬかるんでいた地面に足を取られ千秋がよろめく。

「もらったああああ！」

「ちよっ・・・レノさん！！」

香喃はサツと剣を抜きレノの前に出て足を踏ん張った。

ガキーンッ！！

凄まじい音と、衝撃が空気を震わせた。観衆が大きくどよめいた。

「そこまで！なんで二人とも防具つけてないんですか！！」

思わず怒鳴ってレノの剣を押し返した。

「おっとと・・・」

「あー助かった。悪いな香喃」

「だーかーら！！」

頭を掻き、香喃は苛立たしげに剣をおろす。

「もうっ・・・もういいです・・・」

何を言ってもこの二人は聞く耳を持たないのだろう。

「先生、真田君は荷物をまとめてこちらに来るのであなたも大人し

くして下さい。帝王に報告をして彼を送り届けますからね」

事務的にそれを告げるとレノがニツと笑って剣を揺らす。

「なー、ラーナちゃん。手合わせしてくれよ。防具つけるからさ」

「なんでそうなるんですか・・・」

「だってみなさん期待して見えますよ。たまにはいいんじゃない

？剣だっつけてるじゃん」

「・・・」

剣を抜くとシャランと澄んだ音が響いた。

「いいの？」

「・・・一試合だけです」

「おーいルル！レノとアーシャの試合が見れるぞ！」

衛兵がドアを開けて希に叫ぶ。

「ん……え！？」

あたりを見回すとわずかに乱れたシートと、ぬくもりの無くなったベットだけがあった。

「嘘……」

「早くしろ！めった見られたもんじゃないんだぞ！？」

「う……うん！！すぐいく！」

香喃の剣なんて見たことがなかった。

でもこれだけ評判なのだからきつとすごいのだろう。

やっぱり香喃はすごい。術にたいしても、剣に対しても

「ホントに一試合だけですよ？」

「いいよー。楽しみ〜」

2人は剣を構える。

たがいに礼を交わし、ザツと向かい合う。

「いくぞ」

「はい！」

その瞬間レノの攻撃が繰り出された。フェンリルのハーフともなれば未熟なモノに剣筋は見えない。

だが香喃もそれだけ手練れており、簡単にそれを受け流した。

それだけの動作だがピリツと形を持った威圧感が観客を圧倒する。

「まけんなよ香喃！」

「……」

半分呆れてチラリと千秋を見た。

『元凶はあなたなんですよー！ー！！』

そう叫びたくなるのを我慢し、怒りをため息にして吐きだした。そして動き始めたレノに焦点を合わせる。

次の瞬間、雨の様な斬撃が降ってきた。

盾でそれをガードし、小手を狙って突きを繰り出す。

レノもそれを避けたが身体を中心にガラ空きである。

香喃は多少の怒りも込めてそこを蹴っ飛ばした。

「ぐへっ！」

小さく息を吸い、香喃はそこへ追撃をかける。

「わっ、たっ・・・」

レノもそれをかろうじて受け止め横へとどぶ。

なんだろうか。

闘技場の方が騒がしい。

晁燈は少ない荷物を持ち、そちらへと足を運んだ。

「うわ・・・」

人だかりがすごい。

掻きわけるようにして見てみると千秋が手を振っている。

「こっちだ」

「は、はい！」

晁燈が苦労してそこへと行きつくと調度香喃がレノの攻撃を受け流すところだった。

ギインツと鋭い音がし、盾と剣が火花を散らす。

「あ・・・あ、あれ本物ですか？」

「あたりまえだろ。見てみる。さすが俺の生徒」

千秋は満足そうに笑った。

晁燈はその動きにくぎ付けになっていた。

右へ左へ・・・。

素早い体重移動を繰り返し、香喃は兎のように飛び跳ねる。かわしてかわして、そして隙を見つけて突いて、切りかかって。防御だけでもないし、攻撃だけでもない。

どちらも中途半端になることなく、均等にバランスよく。

晁燈は気づけば口を動かしていた。

レノが左足に体重をかける。曲げた脚は勢いをつけるためだ。

「・・・右の蹴り」

ビュツとレノの足が唸る。

「・・・左手の盾・・・はじいて・・・左を払って・・・」

夢中になってそれに見える晁燈を千秋は驚きの目で見ていた。

レノがズシヤツと地面へと倒れる。香喃に”左足”を払われた。

「・・・右に転がって・・・剣を避けて・・・突き上げる。避けた

瞬間起きて・・・」

「・・・見えてんのか？」

「・・・あっ・・・はい。かろうじてですけど・・・」

それでも異色な事がこいつはわかっているのだろうか。

ましてや二人の動きを先読みするのはきつと千秋でも、手練れの剣士でも難しい。

ずば抜けた集中力。

「・・・続けるよ」

千秋が言っていると晁燈はまた瞬き一つせず二人の試合に見入った。

「あ」

「？」

晁燈の目が嬉しそうに輝く。

「西蒹勝ちますよ!」

「あ？」

「ほら、また足を払って、顔の横にっ」

そう言った瞬間レノが倒れ、横に転がれないように顔のすぐわきに香喃の剣が刺さった。

そして逆側には足、もう片方の足はレノの剣を持った腕を踏んでいた。

ワアアアアという歓声が響く。

気づけば城のほとんどの物はここへ集まってきた。

判定は香喃の勝ち。

レノは負けたにもかかわらず嬉しそうにへらっと笑っていた。

「あゝあ、負けちったよ」

「しょうがないですよ、二戦目ですものね」

香喃は剣を抜き、レノに手を差し伸べる。

「さんきゅー」

細い顎に汗が流れる。

「香喃！！」

高い声。希だとすぐ分かって香喃は焦る。

「お疲れ様！」

「え？」

「レ、レノさんも！タオルどうぞ。お水もくんでありますよ。」

希はにつこりと笑って二人にタオルを渡す。

「ありがとう。」

「香喃やっぱすごいよー！」

希は自分の事の様に喜んでくれている。

香喃もそれを見てなんだか嬉しくなった。

「さっきはゴメンネ。勝手に抜け出しちゃって」

「もう動けるならいいって、ミラさんあと言ってたの」

「なんだ」

一瞬で肩の力が抜けた。

ホツとし、軽めの装具を外していく。

「そういえば何の用で来たの？」

レノがふと聞いた。

「あ」

「あ？」

「あゝ！！忘れてた！すみません、今日はコレで！また手合わせお願ひします！」

香喃は大慌てで装具をしまいに走って行った。

序章(5) (後書き)

遅くなりました。

もう中学三年生は分刻みでテストです・・・
こんなにつらいと思わなかったw

小説は息抜き?も兼ねて書いているのでホントに遅くなってしまいました(-_-;)

でも更新を止めることはないと思うのでこれからもヨロシクお願いします。

用語を編集しますv v

序章（6）

序章（6）

香喃は千秋と晁燈を連れ複雑な城の中を歩く。

「さすが俺の生徒」

千秋はまだ満足気に笑っている。

「・・・言つときますけど、私高校入ってからあんまりやってないですからね。教えてくれたのはクレイドルの人達です」

香喃は小さなため息をつき、大きな扉の前で立ち止まった。

「ここって・・・」

「帝王様の部屋。真田君は」

「晁燈でいいって」

「・・・晁燈はここで待ってて。」

香喃は扉に手を当てた。

ドクン

扉が脈打つ。

香喃の手首が虹色に輝き、その光が扉を満たす。

2人は晁燈を残し滑るように開いた扉の中へと入った。

「よく来た。」

香喃は千秋を後ろへ下げさせた。

「申し訳ありません。まだ調査の結果は出ていないのですが・・・」

「

「思いのほか大変そうじゃの・・・」

その時、千秋が前に出て帝王に頭を下げた。

「お目にかかれて光栄です。帝王様」

「・・・ラナ、こちらは？」

そういえば香喃は千秋という名前しか知らなかった。

「坂本千秋先生です。私が実年齢で高校に行っていた時の教師です」

「洋名は何という？」

チラ、と千秋を見ると彼は口を開く。

「シーカー・オールです」

香喃は無意識に考えた。

Seekerは探究者。

Allはすべて・・・

「・・・全てにおいての探究者・・・か」

帝王がそう呟く。

「よい名じゃ」

「・・・私は嫌っています」

ぶつきらぼうに言ったのに驚きそちらを見ると千秋は複雑な表情をしていた。

訳は解らないが香喃はいつも明るい千秋の初めて見る一面だった。

「そうか。で、おぬしはなぜここに？」

「このたび私は偶然か必然か、ラナの高校の教師となりました。私もこの子の高校には思い入れがある故、その問題とやらを共に解決したいと思っております」

「なので一緒に調査をさせてはくれませんか？彼は私よりもずっと経験が豊富です。」

「・・・それを聞いて断る理由はない。頼むぞ」千秋」

千秋がハッと顔を上げた。

そこには微笑む帝王がいる。はたから見れば普通のおじいさん。だ

が今の彼の表情はまるで仏の様に荘厳だった。

「ありがとうございます」

「……」

「ところで千秋、おぬしはヴァンパイアか？」

「あ……ああ、そうですが……」

「珍しいのう。この子の師もヴァンパイアのハーフだったのだよ」

「そ……そうですか」

小さく首をかしげると香喃が俯いているのが分かった。

「血の提供なら彼女がしてくれるそうだ。」

「「え!?!」」

「今から大切なパートナーだからのう」

前言撤回。やっぱりこの爺さんは鬼だ。

「いずれ解決すればよい。ただおぬしらに何かあっても困るからな。」

「

「ありがとうございます」

香喃がぺこりと頭を下げた。

「あ……」

香喃はその姿勢のまま小さくつぶやいた。

「何じゃ？」

「この世界に一人の青年が紛れ込んでしまいました。」今”の私のクラスメイトです。とても始末などできません。まだ彼はこの世界の事をあまり知りません……そのまま返してはいけなんでしょうか？」

「……ここについての脅威とはなんらか？」

「……その青年は先日逸材だと言った青年なのですが……まだ時期が早いのです。元の世界へと戻し、その意があるのなら再びここへ連れてきます。その間に何かあったら私が責任を取りましょう。」

「

千秋が最後の言葉に目を見開いた。

「まあ良いだろう。」

帝王は驚くほどあっさりと許可した。

「……もうこれ以上わしは息子娘たちを失いたくない」

「え……?」

帝王はその顔に深い影を落とす。

「……怪我がないように、という事じゃよ」

その場の空気に押され二人はドアの外へと出た。

「終わったよ。家に帰れるよ」

「マジ?よかったあ……」

「時間は戻してあげるからこのことは私と千秋先生以外には話さないで。」

「う……うん」

「話したらあなたを”始末”しないとイケない。」

「っ……」

「大丈夫。何かあったら何でも話して」

香喃は始末という言葉にビクリと身を震わせた晁燈に笑いかけた。

「さて……いきますか。」

香喃は千秋に言う。

二人は晁燈を送った後だった。これからこの近辺の調査である。

大きな声を出せないのには都合がある。

ここは民家の屋根の上。二人は黒い洋服に身を包みしゃがんでいた。

「何をするんだよ?」

「簡単です。ここ最近これと行った生活パターンのなかったのに生活リズムができたり、逆にパターンの決まっていたのにいつもと違う行動をした人を片っ端から尾行する。」

「あゝ？こまけえな」
「しょうがないでしょう。最初は小さな変化から。一度見つけてしまえばひきずりだすのは簡単ですから」
それに二人ならいつもより楽、と香喃は笑った。
千秋も深々とため息をついたが、すぐに人々の観察を始めた。

「お前いつも一人ずつ見るのか？」

「いえ、手伝ってもらいます」

「俺にか？」

「いえ。」

鈴羅が笛を吹く。だが音はしなかった。

「・・・モスキートンか」

「そう。」

するとすぐに夜行性の鳥たちが集まってくる。

「ほ・・・」

香喃が鳥たちに何かを告げるとすぐに鳥たちは散っていった。

「操ってるのか？」

「・・・人聞きが悪いですね。ちょっとお話をしただけですよ」

特別な人種・・・例えば魔術師や魔物の中には稀に動物と通じる事ができる者もいる。

香喃はそのうちの一人だった。そして沙捲も。

「あとはここで待つだけ。確認作業だけ手伝って下さいね」

「なるほどなあ」

どんだん夜は更けて行く。

結局その日成果を得ることはできなかった。

一週間後・・・

香喃は今だ高校に通っていた。

晁燈は近寄ってこない。悪い事をしたという罪悪感がどんよりと香喃の胸に立ち込めていた。

だがきつと晁燈はこの事を忘れられるだろう。人間は忘れる生き物だとか誰かが言っていたし。

・・・しかし魔術師にしてやりたいと少なからず想っているのも事実だ。

『・・・私から言う事じゃないか』

小さなため息を吐き、香喃は移動教室のため教科書を抱え立ち上がった。

今日の移動教室は理科。実験をするのだ。

時折千秋と目が合うが今は生徒と教師。お互い自然なそぶりで見をそらした。

席に着こうとしたその時、窓に鳥がぶつかつた。

ドーンツという激しい音がし、あちこちから悲鳴が上がる。

千秋が生徒達を落ちつかせ、香喃に視線を送る。

香喃も驚いたが事態を理解しもう一度ぶつかつてこようとすると鳥に小刻みに首を振った。

『・・・来ちゃだめ。昼休みに屋上に』

そう鳥に伝えると鳥はバサバサと羽音を立てて飛んで行った。

約束通り香喃は昼休み鳥からの報告を聞き、放課後の剣道の部活見学という名義で千秋の元に向かった。

「妖しいのは佳藤理という20代の男ですね。サラリーマンとして働いていますがこの頃無断欠勤と夜中の外出が目立ちます。」

「他には？」

「他にもあと6名ほど。今日は夜大丈夫ですか？」

部員もいるせいとか小声になっている。

「センス！」

「！」

香喃は女子部員の大きな声にビクリと肩をすくませた。

「な、なんだ？」

聞かれていないだろうか？

もしもその時は・・・千秋はこの女の子を生かしておいてはくれな
いだろう。

香喃は祈りにも似た気持ちで女子部員の言葉を聞く。

「今日つて、延長ですよっ！」

女子部員はなんだか嬉しそうに頬を染めている。

香喃が部員だった時、延長などそこまで楽しい事ではなかった。

「あ、ああ・・・そうだな」

「ですよ！解りました！」

意気揚々とした声に香喃はやっと合点がいった。

そういえば千秋だって綺麗な顔立ちをしているのだ。十代の女の子
が淡い思いを抱く事なんてざらだとよく考えれば当たり前的事だっ
た。

・・・魔界に行くかどうかもう感覚が鈍って困る。

「・・・延長・・・ですか」

「お前、いいかげん剣道部に来たらどうだ？そうすれば話し合いだ
つていくらでもできる。」

「いいえ、それはちよつと・・・」

香喃がある事を気にかけて口ごもった。
すると鋭い千秋はフツと鼻で笑った。

「晁燈か。まだ諦めてないのか？」

「・・・だって、私とレノさんの試合の見切り（攻撃を予測すること）ができるんでしょう？」

「ああ・・・ありゃ驚いた。実践経験さえありゃ相当腕がいいだろうな」

晁燈の最大の長所は集中力。

それを生かすことができればこれまでにない魔術師になれるのに。

「・・・でもあちらが怖がつてるんですよ」

香喃は苦笑交じりに言う。

それが香喃が晁燈に話しかけることができない最大の理由だった。

序章(6) (後書き)

ああ約一か月ぶり・・・。

またテストでした(：|;))

でも次は期末でそのあとは楽になるかも、なので頑張ります！

序章が異常に長いですね・・・。

物語に進展が・・・w

序章（8）

序章（7）

視線が合つては・・・

また外される。

また視線を感じて振り向けば

バチンと目が合つて

慌てて目をそらされる。

また視線が・・・

香喃は気づかれないように小さなため息をついた。

今日は延長部活なのにどうして晁燈がいるのだろうか。

『・・・これじゃ先生に近づけない・・・』

参ったなあと頭を掻き、香喃はずっとほったらかしにしていた自分の防具を手に持った。

「お？」

それを見ていた千秋がニヤツと笑った。

「おい、部長。ちよつとこいつと手合わせしてくれよ」

「はあ!？」

香喃が素っ頓狂な声を上げる。防具を持ったのは晁燈に本当に部活をしにきたんですよ、と示すだけであつて、試合などしたくないのに。

「はい！」

今は男子が部長をしているようだ。背が高く、いかにもスポーツをやっています、という体つきだ。

「・・・ちよつと！」

小声で千秋に怒つてみたが手加減するなよとのほほんとした様子

で言われた。

彼は運動部らしい礼儀正しい様子で香喃に問いかける。

「剣道は初めて？防具を持つてゐるってことは、前の学校でも？」

「え・・・あ・・・ええ、そうです・・・」

適当に手を抜こう。そうすれば目立たないし。

これからの作業の事を考えればそれが聡明だ。

言っちゃあ悪いが普通の人間に負けることなど絶対にありえない。

「あのなあ、そいつは全国大会優勝者だからなあ」

「はい！？」

「えっ！？」

見事に2人そろって驚き千秋をそれぞれの感情をこめてみる。

もちろん香喃は怒りだ。

「何言ってるんですか・・・」

「事実だろう？」

「そんな・・・」

部長はまだ固まったままだ。

香喃が剣道部の部長だった時はこの学校の全盛期で、全国大会には

必ず行っていた。

だが何百年もたった今となつてはその事実も忘れ去られてしまった

のだろう。

まず、香喃自身剣道部がこの現世に残ると思わなかった。

それにあえて言えば町並みも。人の見えないところでは人間の数百

年かけて気づきあげた英知が使われているが、外見はあまり変わら

ない。

それは、人間が変化を嫌ったから。

否定的に言わないとすれば、昔の生活で満足を覚えたのだ。

そして人の知恵は環境破壊防止などに使われ、利便的には使われて

こなかった。

・・・それは大きな過ちを繰り返してきた人類の唯一の正しき行い

だろうと香喃は考えている。

しかし大規模な都市に行けば変化は嫌でも目に付くはずだ。
この国の発展を他国に示すため、首都東京・否、今は世界一の都市、東のエデンと呼ばれるその年は築き上げた知恵が惜しみなく使われている。

宙に浮くスクリーン、車、全てが機械仕掛けの眠らない街。

香喃も最初はそれに驚いた。しかし今はくだらないとさえ思う。
全ては禁忌とされてきた”魔法”で数百年前には魔界で使われているのだ。

だから香喃はそんな無理矢理背伸びしたような見えを張りきつたエデンを嫌う。

さあそれはさておき、この部長。

・・・相当チャレンジャーだ。

香喃に笑いかけ、手加減しないでいいから、と言いつつ放ったのだ。
それは香喃は手加減など面倒な事はしたくないし、失礼にあたることも解っている。

だがそれは相手にわからなければいいことだったのに。

千秋がばらすから・・・。

香喃は沸々と沸いてくる怒りを竹刀に込めてぶつけてしまう事にした。

「始め！」

千秋の声。さっきまで聞いていたのにまるで数百年前にさかのぼったような気がした。

いつもはここに七海と理恵がいて。

偶に蓮が見に来てくれたりして。

沙捲が・・・ほめてくれたりしたのに。

今もひよいと顔をのぞかせそうな面々が浮かんでは消え、とてつも

ない喪失感に胸が締め付けられる。

「っ！」

そんな事を考えていると部長の小手が飛んできた。

香喃はそれを軽い足取りでよけ、関節と逆の方向に強くそれをはじいた。

「面あり！」

それは一瞬だった。部長が落ちかけた竹刀のバランスを直すために頭上へ振りあげる前に、香喃の竹刀が強く面を打っていた。

「っ……」

また始めの合図がかかる。

部長は啞然としていたがすぐに表情を引き締める。

だが香喃はその一瞬を逃さない。

スパアンツという高い音が響き、香喃の竹刀が胴を打つ。

「胴あり！！」

「……え……？」

その力の差に愕然とし、部長は香喃を見ている。

「……え……っ……」

視線が痛く、香喃は小さく口を開いた。

「強いね……ほんと」

がっくりと来てしまった部長。そしてその周りに居る生徒は香喃をいまだに驚きの目で見ている。

なんだか昔にもこういう事があつたかもしれない……

「……ってことで、こいつと試合やりたいってやつがいたら俺に言え。手配するからな」

驚きの声を上げようとしたが拳手の声に全てかき消される。

ふと晁燈の事を思い出し振り向いたが、そこにはだれもいなかった。

さっきの試合も、きつと晁燈になら見切りができただろう。

見切りにはそれなり、・・・否、かなりの運動神経と集中力、思考力が必要だ。

だから晁燈もバスケや運動が得意、そして勉強もできる。

弓なんかどうだろうか。集中力があるのなら遠くの敵を狙ったり、急所を狙える判断力も期待できる。それから中距離の刀や大剣などの武器。考える時間が少しでもあれば彼は必ず自分に有利に事を進められる。

「おい、終わった〜」

千秋はパキパキと関節を鳴らし伸びをしている。

「・・・じゃあ行きましようか」

香喃は防具一式をロッカーに入れ、千秋が体育館の鍵を閉めるのを見守った。

二人はまた屋根の上で身をひそめていた。

やはり妖しいのは佳藤理。

他の六人も調査したが何のことはない。

・・・ただの登山家たち。

登山家のグループの6人だったのだ。それならいつもと違う行動が増えるのも解る。

例えば1人は頻繁に図書館に通った。香喃たちはこの街の地形を調べていると思っただが・・・

それは登山で楽しむ野草を調べるため。

他にも目立った外出があった者はただの山登りの準備をしているだけだった。

なんだか気が抜けてしまった。

佳藤理の不審な行動も大したことはないのかもしれない。

この男も無断欠勤と夜間の外出をしているが何処かに出かけるための計画を立てたり、何らかのイベントがあるだけかもしれないし。

そしてまた意味もなく夜は更けた。

深夜1時。

香喃はあくび交じりに千秋に問う。

「もう・・・帰ります？明日もありますしい・・・」

千秋はぐーっと猫の様に伸びをした。

「俺あべつにねなくても平気だけだよ・・・きついなら俺一人でもいいぜ？」

「いえ・・・それっ・・・ん・・・！」

それはさすがに、と言いかけた瞬間、千秋の大きな手が香喃の口をふさいだ。

静かに、と人差し指を唇にあて千秋は顎で下を差す。

香喃が小刻みに頷くとすぐに拘束を解いた。

「・・・見てろ」

千秋が小声で言った。

「・・・」

佳藤だ。ちらちらとあたりを見回している。

そして公園のベンチの裏に身を隠した。

「・・・あそこが”狩り場”だな・・・」

「狩り・・・か。」

佳藤はどう見ても人だ。

「何のために・・・」

ジツと見ていると高い笑い声と複数の足音が聞こえてきた。

「ツチ・・・」

千秋があからさまに舌打ちをした。

「・・・ウチの生徒じゃねえか」

そう言われ目を凝らしてみると剣道部の女子だ。

3人で家に帰る途中らしい。

佳藤に目を向けるとにや、と口元があがった。

「・・・まずくないですか？」

「・・・ああ」

「・・・」

助けに行くか行くまいか迷う。

今ここで助けたら佳藤は二度と尻尾を出さなくなってしまう。

だがもしも生徒に何かがあつたら剣道部を延長させた千秋に責任がかかってしまう。

千秋も教師としての想いもあつてか眉をしかめている。

「・・・せんせ」

「あ・・・？」

「・・・助けに行ってください」

「だがそれじゃ・・・」

「あなたは教師です。偶然通りかかったふりをして、早く帰るように促すんです」

「・・・お前は どうする」

「・・・彼女たちを送り届けたらすぐにここに戻ってください。私があいつにつかまりますから」

そう話している間にもどんどん近づいてくる。

「だがもしも・・・」

「・・・何年生きて来たと思つてんですか？あなたならこれで・・・
そういつて親指の先を噛みちぎる。

「！？」

血が珠になつて零れ落ちた。白い指にそれが流れ落ちる様に千秋はくぎ付けになる。

「この匂いで分かるでしょう？じゃあお願いしますね」

そういつて彼女が背を押したので千秋は慌てて屋根から降りた。

「あ、せんせー！」

元気な声を聞いて、少し緊張が緩んだ。

「ったく・・・お前からこんな遅くまで何してんだ？」

「えっとお、さっきコンビニに・・・」

「あのなあ最近ここらで変質者でるのわかってんでしょうが。ただでさえ延長で遅いんだから、ほら早く家に帰れ！お前らに何かあったら俺が責任取ることになんだからな！」

「はっい、ごめんなさい」

とはいってもまだ心配で千秋は一応3人を家までせかして送り届けた。

そして最後の一人を見届けてから猛ダツシユで公園へと戻る。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

息を整え、気配を探る。

・・・だめだ。もういない。

香喃の姿もなかった。

「クソ・・・」

間に合わないか、と悪態をつき鼻をひくつかせる。

血の甘い香りについて行くように千秋は歩を進めた。

千秋が出てきた瞬間、佳藤は上げかけた頭をサツと隠した。

千秋たちが行ってしまった後、苛立たしげな舌うちも聞こえる。

こういう時が一番のチャンスだと香喃は知っていた。

怒って、上手くいかなくて逆上している時。判断力が最も鈍る。香喃は携帯をいじるふりをしながら公園に入る。住藤はまだベンチに居る。

携帯のウィンドウを消し、ポケットに入れ歩く。

がさ、と音がした。

気づいていないふりを突きとおす。

だが心臓がバクバク高鳴っていた。怖い。

何をされるかわからないのだから、とてつもなく怖い。

千秋が助けに来てくれると信じていても、すぐに殺されたらどうしよう。

いくら長く生きても、どれだけ多くの戦いをきりぬけたとしても、死への恐怖を克服するのはまず無理だろう。生きている者にのしかかるある種の枷だ。

そんな恐怖がズン、と体にのしかかり歩がのろくなる。

『・・・私がやらなくてだれがやる・・・』

怖いと思ってどうにかなるか？

他の人間にこの想いをさせてもいいと思うか？

千秋を信じていないのか？

そう自分を叱咤し香喃はベンチへと歩を進めた。

「きつ・・・ヤッ！」

その瞬間だった。誰もいないと思っていた後ろからガツと捕まえられる。

すぐさま薬品臭い布が顔に押し当てられ、ひりひりとした独特の感覚が襲う。

「んっ・・・！！！！！！！！」

ベンチに目を移すと佳藤かと思っていたそれはただのジャンパーを身代わりとしてひっかけてあっただけだ。どうやら敵は思っていたより利口らしい。

香喃は息をとめ、抵抗する。

だがふと想いとどまった。本当はここで千秋に助けてもらおう”予定”。

それでこいつを尋問する。

だがもう少しこいつについて行けばもっと深いところまで探れる。

ふ、と力を抜き気絶したふりをすると男は嬌々として香喃を持ち上げる。

「・・・」

そつと指を傷つけ止まりかかっていた血をもう一度流す。

『・・・上手く行ってよ・・・』

祈るようにしながら香喃は暗闇の中を運ばれていった。

「ここだな・・・」

千秋は無意識に呟いていた。

香喃の血のにおいを追うとマンホールの下へと続いていた。

下水と言っても昔とは違う比較的清潔な水が流れている。

だが千秋はむかむかとした吐き気が抑えられない。

『クソ・・・』

ある光景がフラッシュバックする。

【千・・・秋・・・】

幻聴まで聞こえてきた。

か細い声は間違えなく”彼女”の物。

千秋が失ってから気づいた一番大切な人の声。

序章（8）（後書き）

次話は千秋中心のお話です。

更新遅くなりました。感想を書いて下さる方がいて、とっても励みになっていきます。ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4126w/>

Fallen Angel

2012年1月14日01時01分発行